OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪の将来と公衆衛生
Author(s)	梶原, 三郎; 川名, 吉右衛門; 関, 悌四郎 他
Citation	大阪公衆衛生. 1963, 12, p. 2-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

■ パネル・ディスカッション

大阪の将来と公衆衛生

昭和38年9月30日　第6回 公衆衛生大阪大会
大手前会館

座長　最初に、今まで、忘れられがちであつた、人間の生活環境を守るという考えが、将来の生活の中へ取入れられてほしいと思っています。

都市計画をご専門の川名教授、阪神高速道路公団理事長の栗本順三さん、公衆衛生の関教授、建築衛生の田中教授、4人の方に、それぞれの立場から、将来の計画、こうあるべきだという話を願い、次に討論に入りたい。

住みよい町づくりが、都市計画本来の目的、しかし現実は、

川名　都市計画は、古い昔から、いろいろな形でやられてきました。昔は王様の宮殿を立派にし、まわりを荘厳にし、威厳を高めることなどが、狙いでしたが、現在の都市計画は、住民のために住みよい町をつくるという理念で進められています。

しかし、最近の都市計画で話題になることは、本来の主旨から、かけ離れたことが多いようです。現在、日本の産業界は、大きな変革をとげている時代で、職場のある都市へ人が集まっていますが、この度が過ぎると、これに見合う施設が不足することとなり問題が出ています。又、技術革新が進み、世界経済の中で成長するために、職場にも変革がおき、これに応ずるための都市計画もあるわけですが、本来の目的である住みよい町づくりと、産業の発展に応ず町づくりが、ごちゃまぜになって、問題をかもし出しているのが、現状だと思います。

今、韓国ではコレラが発生し、日本は、この侵入を、くい止めていますが、日本も都市が近代化した初めのころは、悪疫の流行で苦しみました。その際、都市計画のあり方が論ぜられ、そして、ともかく、上水道、下水道の整備から、進められてました。

都市に職場があり、いろいろな人が、それぞれ違った目的で生活すると、お互に、問題が、ぶっつかり合うものです。

明治の始めには、煙を出す工場のそばに、住宅が建ち、石炭の煤煙が問題になりました。そして

語る人

座長	梶原三郎
大阪市立大学教授	川名吉右衛門
大阪大学教授	関悌四郎
大阪市立大学教授	田中良太郎
阪神高速道路公団理事長	栗本順三



梶原　三郎

公害をなくすことからも、公衆衛生の立場からも工場や住宅を建てる場所を、明らかに分け、必要な設備をしようという考え方で、都市計画も進められてきました。しかし、現在の大阪は、明治のころのように、工場のすぐ近くに、昔よりは、部屋数も少ない、環境の悪い住宅が立ならんでいます。住みよくするための制限である都市計画が無視された形で進んでいるのが、現状です。

お互の制限の中から明日の発展を

今日では、更に、自動車の増加に伴い、交通制限が行なわれ、又、自動車専用道路が、つくられ始めました。新たな道路を計画して、気づくことは、これまでの道路は、その下に、上下水道、ガス、電気、電話のパイプや電線を通し、多目的に使われていたことです。そのため、常に〝堀起し〟が行なわれて、苦情の種になっていました。

道路の専用化を考え、その下にあった、公共施設を、別につくるとすると、町全体の構造を変える必要性が生れ、大阪再開発ということまで出てきました。しかし、都市の近代化を進めようとすると、個人の生活や歩くルートまで変ることになるので、簡単にできません。そこで、お互の制限の中から、明日の発展を１つの方向として、出さざるを得ないのです。

大阪の、秀吉以来の老令化した町づくりも、つくりかえの時期がきています。

明日の大阪を夢みながら、お互の協定を都市計画の中へ包みこみ、制限を伴いながら、必要な組織や設備をつくり上げてこそ、住みよい、又、衛生的な町づくりができるのだ、といえよう。

座長　都市計画は、約束を守ることに徹しないといけない、ということだと思う。皆が守る約束は法律的な定め、ということになると思うので、その点について……。

ちぐはぐな町づくり……
行なわれていない当然の制限

川名　多くの人が、限られた地域で生活する場合この地区には、工場の建物は、建ててはいけないという制限、法律的な言葉でいうと「用途地域制」といった制度があります。しかし、これは、大阪市、布施市、八尾市、守口市などに限られ、それを越えた先では、住宅の隣に工場が建ってもかまわない、といった無統制な形で進んでいます。このような煩わしさを整理し、悔を残さないようにしたいというのが、用途地域制の本来の願なのですが、しかし現実は、郊外の良い土地をみつけて住宅を建てても、その近くに、又工場が建つといったありさまで、互に、煩わしい問題に悩む結果となっています。又、郊外地では、道路さえできれば、その近くには、排水の後仕末も考えない建物が建てられてしまう。行うべき制限が、充分行き届いていないのが現状のようです。

下水道やごみ処理には、日頃から苦情の多いものですが、ごみを集める作業が、せまく、入りこんだ道路のために、うまくいかないことが多い、宅地を勝手に建てほうだいにすると、このようなことになります。そこで道路と宅地を初めから準



川　名　吉右衛門



関　　悌四郎



田　中　　良太郎



栗　本　　順　三

備をするのが「区画整理」の考え方です、これも実は、大阪の周辺では、明治以来、大正時代にかけて、うまくできていたのですが、それが崩れてしまいました。近代的な都市に大きく脱皮されるという現段階においてさえ、まだ明治以来の初歩的なルールや手法すら行なわれずに、チグハグな町づくりが、今進んでいると思います。（拍手）

座長　関教授に、最近の衛生状態の下で、特に注目されることについて、指摘して下さい。

せまい公衆衛生の領域

関　今、都市計画は、「重要な問題だが困難である」という話をいただきました。

言葉を変えれば、「残念ながら」が積み重なって、今日の都市計画、地方計画に至っているものと思うのです。

このような問題を前にして考えるとき、現在、わが国の公衆衛生の領域は、厚さや領域が狭いことに気がつく、しかし、イギリスでは、内容はもちろんですが、「公衆衛生」の本の広告をみても上下水道、建築や資材、排水、冷暖房、住居、道路等に関係のあるものが主で、日本の場合は、狭い医療技術関係が主です。広告は、案外端的に、その内容を示していると思えるのです。川名先生からお話のあったような、巾広い社会的な要求をもはや医学だけを基礎にした、医学的な衛生学では、収拾することができなくなっているのが、現在の状態と思います。

しかし、その反面、衛生工学や社会科学自体もまだ確立しているとはいえない。日本の悪いゴミを焼く炉の設計も、まだまだの状態と思えるしごみの苦情が、自治体の協力による焼却炉の設置というような形で、実際解決に結びつくとこまで社会的に成熟しているとは考えられないのです。

私は、都市計画や地域開発に当面し、われわれの立場を反省して、2つの点を取上げたい。その1つは、少くとも、総体的には、社会的条件が発達し、成熟している状態に比べ、公衆衛生で扱う範囲が狭くなっているという事実であり、第2はそれを認めた上で、その遅れを取り返すために、これから、どうしなければならないかということです。公衆衛生の領域が、せまいといいましたが例えば、昭和36年に、大阪府と市の交通災害で死んだ人、それも、道路上の事故で、42時間以内に死んだ人は、1,100名、負傷者は約3万人もあるのに、救急車で病院へ運ばれたのは、1,200人、6.4％しか、救急車で病院へ運ばれていません。東京都は、その割合が25％、京都は24％で、大阪は低い。

救急車1台に対する人口は、大阪市が40万、東京や京都は13万、更に、イギリスは1万の割で、大阪は、パトカーや病院の患者輸送車の活動を計算に入れても、はなはだ不充分といえます。

収容先は、70％近くが私立の病院で、公立の場合が少ない。

現在、救急医療の技術は高いレベルに達していますが、実際にその技術を「犠牲者」に用いることが、難しい状態で、この解決には、まず完備した交通災害緊急医療技術センターが必要です。

とり残されている公衆衛生

現在までの、このような救急活動に対する、公衆衛生関係者の協力や、参加のための努力は少なかったといえます。全般的にも、公衆衛生の側から、医学技術に注文をつけて、進歩を促すといった努力が、あらゆる面で遅れ、とり残された形になっています。

上下水、清掃、公害の問題の解決は、行政的に社会的に実現がはかられる状態であり、住宅、交通についても、人間の健康に関する限りにおいては、公衆衛生の対象となるべきものだと思います

考えよう公衆衛生の将来

大阪では、幸い公衆衛生が、医学技術の進歩をとり入れ得る態勢を整えていますが、更に、衛生工学や社会科学等、関連技術との連けいをつくり上げる必要があります。そのためには、広い角度から公衆衛生を構想する機関が必要と考えます。

都市計画や地方計画に対する、公衆衛生側からの発言が、遅れがちで、明確さを欠くという批判があります。しかし、これは、現段階では、止むを得ないのです。

将来の公衆衛生は、概念的には、衛生学と社会科学の間に位置づけられると思う、しかし、まだ、はっきりと、将来を見定め、方針を立てる以前の段階にいるようです。公衆衛生全体として、将来計画を具体的に立てるには、残念ながら、まだ、力不足であると思います。理想論になるかもしれないが、公衆衛生の将来の方針や位置づけを考えていくということが、われわれの1つの大切な方向ではないかと思います。（拍手）

座長　交通災害について、手うすな点、又、残念ながらが、都市計画等にはつきものだ、といわれたが、人間を守るために全面的に役に立つという覚悟が必要だと思います。

次に、田中さんから、産業的な建物や人の住居について、お話を願いたい。

個人の衛生を守ることが出発点

田中　現在、われわれが感じている欠かんを見つめながら、将来のことを考えていきたい。都市の大きな環境としては、産業関係と居住関係の両方があります。本日は、居住について考えてみたい

日本の公衆衛生と、アメリカのものとでは、同じ概念からきていないようだし、公衆衛生学と一般にいわれる公衆衛生にも違いがあると思います衛生学は、そのことが実現されることが重要なのですが、その段階になると、行政的な問題がはいり、分類も、所管業務によって行なわれているように感じます。

私は、個人の衛生を守ることを出発点として、公衆衛生を守るということを考えてみたい。

衛生学の最初は、やはり個人衛生から出発していると思います。

「工学」は、生産や建設の方にばかり働いていてサービスの面には、遅れています。〝衛生工学〟があるとしても、その基礎には衛生学があるはずで更にその基礎は、やはり個人から出発してほしい。

大切な人間として助け合う精神

公衆衛生の中で、個人に関連するものでは、公衆道徳ということで、片がつくことが多い。個人には、生活の権利と共に、集団に対する義務があるわけで、騒音で他人が迷惑しないようにすることは、衛生学上必要なことですが、その以前に、道徳上必要なことなのです。又、ごみの問題でも、個人で始末できるものは始末して、仕分けして出す、といった風に、個人の公衆道徳で片付くことが相当あるはずで、どうも、お上にたより過ぎているようです。

大切な公私の区別

法律に頼るのではなく、お互に人間として助け合っていこうという精神の方が重要です。しかし居住関係で、個人としてやらなければならないことは相当ありますが、しかし、それと、行政団体がやらなければならないことは、はっきり区別する必要がある。たとえば〝公害〟も、公害と私害に分れており、公害は、害の発生源がたくさんあって、一般住民に影響を及ぼす場合で、ある1つの工場が汚染源になっていると、判っている場合は、私害です。両方一しょに取締ることになっていますが、街路騒音などは、個人の被害は大きいのに、行政的な措置は、とりにくいのです。

高速道路は、重要施策として、おし進められています。しかし、これがフルに利用されるとすると、周囲は、騒音と排気ガスで、居住環境を阻害されることになります。自動車の排気ガスについては、自動車に、有毒ガスを除く装置をさせることで、その規制は簡単ですが、いろいろな工場群から出される、悪ガスや騒音などは、窓などから住宅内へ侵入しています。このような、不特定多数の発生源には、その1つ1つを規制するのですが、昔のような居住環境はできない。やはり、1人1人が、他に迷惑をかけないようにすることです。このように道徳的に個々の人が守らなければいけないこと、又、下水処理のできていない地域では、水洗便所には浄化槽を設備することなど、発展途上、しかたなしにやらなければならないことなど、いろいろ混っています。

都市の空気全体が悪くなった理由は、川名先生のいわれたように、用途地域制の問題からきているのでしょうが、大阪市内には、1部を除き、ほとんど住宅地というのは、なくなっているのでは

ないでしょうか。

最近のように人口が増えてくると、都市にくっついていなくてもよい施設、例えば、問屋街などは、市の外へ出ています。又、東京は、官庁でも政府に直接関係のないものは、外へ出そうとしています。住宅と、これに伴って商店、問屋、そして、官庁の一部まで出るとすると、市内には、ビルと、遊びに行くための繁華街が残るだけです。

今の住宅政策を考えて見ると、せっかく、昭和14,5年頃に、親、子供2人の4人住いで、少くとも、18坪という「標準住宅」が考えられていたのに、現在建てられている住宅や、住宅公団や府県市営住宅は、1～3室の、少さいものばかりで、寝るだけがやっとです。若い人も、年よりも、外へ出なければ楽しめないし、生活ができない。

今後は、勤務を終えた人の、住居の使い方によって、住宅も変ってくると思います。

市内に残った人の住宅は、郊外とは違った、市街地に適応したものを考えるべきです。このままでいくと、例えば、大阪駅の貨物駅を整理したらそのあとに何がくるだろうかと、考えてみると恐しくなります。

個人の健康を守るというところから、公衆衛生は出発してほしいということを、特に申上げたい。（拍手）

座長　次に栗本さんから、お話を伺いたい。

栗本　最近、地域開発や大都市の整備等に関係して感じたことを申上げ、お互に市民として考えてみたい。

必要な住民の理解と協力

大阪市は、交通マヒ、スモッグ、汚れた川、と住みにくい都市です。これを、いかに住みよく直すか、というのが、再開発や整備ということであると思います。

都市の体質改善には、金がかかるから、国や府市に努力してもらわなければならないが、しかしわれわれ市民としても、これに協力するのでなければ、うまくいかない。

建設省は、39年度から5ヶ年で、全国に5兆の金を出し、道路をよくしようという計画を進めています。大阪市も、この5ヶ年計画に対して、すでに雄大な計画が考えられています。

しかし、計画があっても、地域住民の協力がなければ道路はできない。

道路をつくる上で一番難しいのは用地の買収でこれができれば、9割はできたと同じだといわれます。移転しなければならない人には気の毒で、妥当な補しょうがされるべきだが、しかし、住民がゴネ得という気持で、居すわられたのでは道路はいつまでたってもできません。

次に、大阪は、東京に比べても、空地や緑が少なく、一番まずい都市だ、とっいてもよい。今、梅田貨物駅や阿倍野の墓地移転が、いわれています。終戦後には、大阪にも軍用地が空地として、ずいぶんあった。しかし、それを公園にせず、売さばいてしまった。大阪城公園の公園地と称されている地域にまで、工場ができている状況です。

私たちは、今後、このあやまちを、繰返してはならない。国鉄貨物駅や阿倍野墓地が、近郊地へ分散したあとには、空地として緑を植えるべきです。

私自身大阪人だが、大阪人には、他の人に比べて、木を愛する気持が勝っているとは思えない。戦前、上町台地から帝塚山にかけてあった緑地は、ほとんどなくなっています。

大阪は、土質が悪く、木が育たないといわれるが、育てる熱意が少ないのではないかと思う。せっかく植えられた街路樹に、練炭の灰を捨てる人わざと枯らすために、タバコの煮汁を捨てる人さえいるということです。

大阪は、もともと木が育ちにくいのだから、それだけに、市民は木を愛す気持になるべきではないでしょうか。

できることは自分達で

それから、今一つは、水の汚染の問題です。大阪の近辺では、もう海水浴はできない状態で、公共団体が、下水を完備し、し尿の汲取を十分にし塵芥の処理を行届かせるべきですが、同時に、市民としても考えるべきことが多い。市内の堀や川へ、汚ない下水を流したり、又、ゴミを捨て、市

の清掃局はその清掃に苦労しています。私たち大阪人は、商人の町で、時の権力におもねらず、自分たちのことは、自分たちで処理するという、過去の歴史をもっています。住みよい町にすることについて、自分達で、できることは、少なくとも自分達で努力するのだ、という気持を持つべきだと思います。皆さんにも、それぞれの地域で、御努力とご尽力をたまわりたい。（拍手）

座長　かつて、日本で、うんと金をかけられた公共的な施設というと、鉄道が考えられます。鉄道を敷設したために、都会に下水をつくる金がなくなった。今度、又自動車道路をつくる。そのために、下水を敷設すべき事業ができないというおそれは、おきませんか？

栗本　前にも、ある所で同じような質問をいただいた。道路は、相当の財源がいりますし、国や府市の財源は限られているのだから、一般境環施設は、ややもすると遅れる気運がある、やはり理事者も、よく考え、住民も、その点を見落さずに要望をすべきだと思います。

座長　ひとつ、そのところを、よろしく。又、高速道路、インターチェンジの下の空いたところなど、公衆衛生施設などに使っては……。

栗本　ごもっともです。私の方も、大体、来年の5月いっぱいで竣工します。現在運河になっているところは埋めたて、市の公共駐車場や子供の遊び場やプールなどを作ってはと考えています。道路の下も住民の福祉のための施設に、と考えていきたい。

座長　お話なさった方々の間で、討論される問題でもありましたら……。

川名　市街地が、近いところに多く集まっており又、市街地の中での密度も高い。そういう点は、外国と事情が違っています。又、道路が狭い。大型の四輪馬車の時代が、日本にはなかったことによるのでしょうが、道が狭いことが、現在にも響いています。

座長　建築学的に、何かよそにないようなアイデアで、事をやらなければ、という事態になってくるのではないでしょうか。

川名　たしかに密度は高いが、それは、木造の低い家で、いっぱいだという形なので、立体的な土地利用が提案されています。

関　道路に金を使ってしまって、下水、公衆衛生関係等、公共の金がなくなるのではないか、ということについて、今も、「よろしくお願いします」ということでしたが、これについて、現在理論はあるのでしょう。事実は、理論通りに行かずに、非常に抑えられている実情なのですが。

川名　町づくりという立場からは、お話のようにバランスを求めながら、徐々にやるのが大原則だと思います。しかし、日本の都市は、現在も、そして過去も、住民のための施設をするための金を、非常に少なく使ってきている。国や市町村は、それぞれ、金を使うバランスを考えるべきです。

下水処理やゴミ処理は、府や市に頼らざるを得ない。しかし、この仕事は、手数料を高くとることはできない。ほとんど、タダでやらざるを得ない。従って、財源を求めるのが苦しい。

関　昔から「止むを得ず」ということがなかった時代は、ほとんどない。常に止むを得ずです。

将来計画をおやりになるとき、止むを得ずばかりでなく、原則のようなものは、ありますか？

財政上のバランス、あるいは、そういうことについての原則……。

川名　町づくり自体としては、そういうバランスも、とられてきています。たとえば、新しい住宅地、公営住宅、公団住宅などのように、最初から必要な施設をつくり、その地区としては立派なものを作るやり方を進めています。ところが、戦前でも、実は郊外の立派な住宅地では、それがやられていました。ところが、その設備そのものが果して適正な基準であったか、ということは、今になってみると問題があります。

昔は、住宅の経営が十分成り立ったが、戦後は貸家の建設や経営が成立たなかった。最近、ようやく貸家が出始めているが、出たものは、なんと

アパート形態の狭いものです。こういうものが数多く立つ中へ公共施設を、どのように突込んでいくかで、どことも悩んでいる問題です。

大切な住宅事業の規正と保護

公衆衛生協会として、ぜひ取上げてほしい問題として、このような、貸家や長期分譲住宅があります。都市生活の中では、住居の提供という事業は、大事なものと考えます。この事業を、公衆衛生、住みよい町、これなら適当だという住宅の供給をするという義務付けの中で保護する方法、貸売なり、建売りなどの営業に、取締りも含めた助成法というものがあってもよいのではないでしょうか。

一晩しか泊らない旅館でも、旅館業法で監視が行なわれている。ところが、一生を托そうという住宅には、そういう取締りは、全くない。私は、学生に、一晩のキャンプ地でさえ、水、災害、害虫と、予め点検が行なわれるのに、都市の住宅の場合は、そういう心配を誰がするのか、ということをいっています。

都市計画と住宅供給とは、一体になっていなければいけない。公衆衛生の立場から、ぜひこういう問題を取上げて新しい方法論を出してほしい。

関　住宅のめんどうをみ、建て方に対し注意を出すという面では、外国が非常に進歩している。日本でも、ある程度建つてきた段階で気をつけるべきだと思います。

座長　今日の毎日新聞にこういう広告で出ている「着々建設すすむ近畿圏の中心大阪」という題で、大阪はいま建設工事で町中がひつくりかえっている。どこへ行つてもクレーンの林、ブルドーザーのうなり、太閤さんが開いたときをしのばす急ピッチな町づくりに、ナニワの町の面影は、日に月に様相を変えている。年10センチも沈む地盤沈下。車でにっちもさっちもならぬ交通マヒ。定員の三倍もつめこんで走る地下鉄、子供たちの目からお星さまを奪う煤煙、魚さえ住めぬ黒い川、異臭 etc. 大阪の「大都市病」は、もう頂点にきて、このままゆけば、大変なことになる——と町中をひつくりかえすような町づくりが進められているわけだ……」このように書いてあるのですが今日の講師の方々に「大都市病」をひとつづつここであげていただいたら……。

栗本　人と物とが集まりすぎていると思う、そんなに集まらない方策を講ずることです。

座長　大都市病は、都市自体の病気で、それは、個人が、経済活動に参加するのを阻害するようなことだといえる。栗本さんも、人や物の集まり過ぎが、個人の経済活動への参加を阻害しているといわれているようだ。唯、私達は、その中で人間の住める環境を持とうと望んでいる。そこで、大都市病と考えられているものと、公衆衛生が考えていることとが、どこかで食い違う場面が出てくると思う。そこを何とか調和をつけていくのが、将来計画だと思います。

最近の論説でも、高度経済成長のための建設は、国土を破かいするという論を立て、その中で、金で買えない尊いものをつぶしていくと書いている

金で買える環境というものは、金で買いとらなければならぬ重大な時期に、公衆衛生は、今きていると思う。

大会宣言をやつて、ひとつ奮起しなければならないと思います。（拍手）　（文責編集担当者）

